

1. 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。(4:6)

- a. パウロは自分の死期が近いのを知り彼の霊的息子テモテに対して最後のお別れの手紙を書いている。パウロは皇帝ネロの命令によって斬首刑になるだろうと悟っている(教会史研究たちによると)。ローマ帝国がすべてを支配していた世の中で、パウロはイエスこそがまことの主であり救い主であるという急進的な主張をし、国家の脅威とみなされていた。
- b. パウロは残された時間が少なくなるにつれ自らの状況を旧約の「注ぎのささげもの」に例えている。それは火の中に杯の中身を注ぐ儀式で、現実的な人は上等なワインを無駄にしていると言うかもしれないが、神の礼拝者はそれが神が喜ばれ受け入れてくださるささげものであることを知っている。現代の礼拝も同じで、礼拝や供え物をささげることはある人にとっては時間とエネルギーとお金の無駄に見えるかもしれない。しかしイエスに信頼を置く者にとっては神に喜ばれ受け入れられるものだということがわかるのである。
- c. パウロはまた、この時期を出発になぞらえている。ギリシャ語で出発という言葉は舟が波止場からほどかれる時に使われる。この場所から離れるというイメージとともに、自由になるというイメージもある。

2. 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。(4:7)

- a. この世を去り次の世に移るにあたってパウロは2つのメタファーを用いている。一つは戦い、そしてもう一つは競走(レース)である。これらは信仰を守り抜くために必要な要素であった。人生は時には戦い、時にはレースである。信仰を守り通すためにこの2つの違いを知ることは重要である。
- b. 人生は時として戦いである。戦いには2人以上の人が関わって来る。ただ相手は必ずしも人ではなく、文化的習慣、社会制度のような場合もあるかもしれない。戦いにおいてはルールや条件を知っておく必要がある。もし戦いをレースのように扱ったらほとんどの場合負けてしまうだろう。パウロは偽クリスチャン、偽リーダー、文化的慣習や国の役人などと戦わねばならなかった。彼はただ座って何も言わず眺めていたわけではない。戦士が戦場で戦うように取り組んだ。
- c. しかし人生はいつもが戦いというわけではない。レースのような時もある。レースを戦いのように取り扱おうと失格になってしまうだろう。戦いでは敵のことを知り、戦略を組む。しかしレースでの敵は隣の走者ではなく自分との精神的な戦いである。場合によっては人生のレースにそうと気付かず戦いのように取り組んでしまい、他のランナーの妨害をして自分が失格になってしまうこともある。
- d. レースは自分との戦いであり、周りの人からの励ましによって走り続け、忍耐と我慢によって完走する。戦いにも忍耐と我慢は必要だが、最終的に打ち勝つためにはしばしば対立を乗り越えなくてはならない。ゴリアテが負けたのはイスラエル人がじっと待っていたからではなかった。約束の地が与えられたのは人々がただ座って待っていたからではなかった。イエスに敵対していた宗教指導者たちが負けたのはイエスが立ち去ったからではなかった。パウロは偽クリスチャンや偽リーダーたちに対して何も言わず待っていたのではなかった。

3. 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。(4:8)

- a. 戦いなのかレースなのかを判別するには天からの知恵が必要である。単に公式に当てはめ、これは戦い、これはレース、と決められるものではない。ただし戦いであれば正しい側に付き、レースであれば周りの人との戦いではない、ということを実感しなければならない。
- b. 私たちも人生を終える時に天の報酬を期待できるよう勇敢に戦い抜き、忍耐を持って走り抜こう。